

年配の劇団OBに交じり、高校生や大学生といった若い世代も客席を埋めていた。愛知教育大の「劇団把夢」は結



→ 2 →

G/pit

名古屋市中区



松井真人

成四十周年を迎えた今年、新春公演「宵の音鐘」をG/pit（名古屋市中区）で上演した。壁、床、天井が黒一色。照明や舞台美術を効果的に見せる「ブラックボックス」は、劇場空間の定番だが、名古屋

今年のチャレンジフェスティバルで大賞を受賞した劇団把夢の「宵の音鐘」は名古屋市中区のG/pitで



では意外に少ない。「奥行きのある舞台をどう生かすか、脚本を書く段階から試行錯誤



した」と作・演出の教育学部三年生の中西大智は話す。昨年の公演で利用した際、劇場の特徴に合わせた芝居作りの面白さに気が付いたという。

## 若手育てるフェス開催

演劇を始めた動機は「目指している教師の仕事は、演じる」という点で役者に近

「演劇の資源は人。なのに名古屋では演劇で稼げなくても仕方ない、と考えている人が多い。でも、仕事になることで継続できる。そのため仕組みが必要ではないか」と訴え、フェスを通じた支援に力を入れる。（長田真由美）

た」と語るのが、若手劇団を対象とした劇場主催のチャレンジフェスティバル。劇団が競い合い、審査員が講評する。「出費ばかりでもうからない」と苦笑しながらも、十年以上続ける。名古屋の小劇場界は若手が継続して演劇に打ち込むには、環境がまだ整

次回は十七日に掲載